

# 東日本大震災津波から生まれたつながりと絆

## ～学校間交流と地域通貨～

岩手県立宮古商業高等学校教諭

鎌田 秀哉

このたびの東日本大震災津波に際し、全国各地より多くの支援をいただき感謝いたします。公益財団法人全国商業高等学校協会より、義援金のみならず被災した生徒に対して全商協会主催の各種検定試験の受験料免除をしていただきました。全国各地の高校からも救援物資や義援金を寄付していただき、本校では被災した生徒への支援を中心に有効活用させていただいております。今回、東日本大震災津波後に本校で対応したこと、その後に生まれた震災復興に関する学校間交流について情報提供いたします。

本校は、本州最東端の岩手県宮古市にあり、海まで約100mの位置に校舎はありましたが、高台だったため津波の被害は免れました。5分ほど続いた大きな揺れにより、生徒と教職員は体育館に避難しましたが、最大30mの津波が宮古を襲いました。



そのため、電気・水道・ガスといったライフラインは分断され、通信手段もなくなりました。当初、教職員は生徒の安全確保と校地内の点検をしていましたが、地域住民が着の身着のまま本校に避難してきたため、避難者を体育館へ誘導しました。体育館は、生徒と教職員約200名と避難してきた住民約200名の避難所となりました。

しかし、本校は地域指定の避難所となっていなかったため、避難所の運営に関するマニュアルはもちろん、非常食などありませんでした。ありったけの布団をかき集めても避難者へ提供するのが精いつ

ばいで、食料は避難してきた食料品店の店長から許可をもらい、被災した店舗から食べられそうなお菓子類をいただきました。2日間は食料がほとんどなく、冷え切ったおにぎりを半分に切って提供することもあり、衣食住の不安がありました。生徒は、手当てを必要とする住民や寝たきり高齢者、津波により冷えきった作業員など、多くの避難者に自分のできることを考えて行動しました。学校にあるストーブの給油や、行方不明者を探す人の受付などで、教職員は不眠不休の対応をとりました。震災当初は全職員の24時間勤務でしたが、その後24時間2交代、8時間3交代へと徐々に緩和されていきました。不安の中で9日間の避難所運営を行い、疲弊しました。

その後、岩手県では阪神淡路大震災の教訓をもとに、いち早く学校を再開することが最重要課題となりました。本校でも学校再開に向けた準備に取り組み、4月下旬に始業式・入学式を行いました。津波の被害に遭った近隣の宮古工業高校が本校で授業を実施するなど、通常とは違う学校生活が始まりました。本校の周りは信号機や街路灯もなく、震災の爪痕が残る場所を通学させることに異論もありましたが、今考えると早期の学校再開は最善策であったと思います。

本校で実践している模擬株式会社宮商デパートも、実施困難ではとの声もありましたが、実践することができました。この活動が岐阜市立岐阜商業高等学校との学校間交流につながりました。震災直後、デパートを実践している本校を支援したいとの連絡をいただき、先の見えない不安の中に見えた光明だと感じました。その後、毎年10月下旬に行われる宮商デパートに合わせてさまざまな支援をいただきました。来場者向けに市岐商館の提供や生徒直筆の応援メッセージで地域住民は大変勇気づけられました。また、岐阜市近郊の企業より農産物や特産物をいただくこともでき、宮古市民に提供することができました。さらに、11月3日に行われた市岐商デパー

トへ本校生徒・教職員を招待していただきました。今年度は壊滅的な被害にあった宮古市田老漁業協同組合も参加し、販売活動を通じて復興している姿を岐阜市の方々に感じていただくことができ、大変有意義な交流となりました。



宮古市内の商店街は津波の被害に遭い、いまだに営業できない店舗もあります。そのような中で、震災後は復興を兼ねた商店街イベントにチャレンジショップとして出店させていただきました。商店街を盛り上げようと復興イベントを企画したのは、全国各地から集まった商店街復興ボランティアでした。そこから福岡県北九州市若松区明治町商店街復興組合および福岡県立若松商業高等学校とのつながりが生まれます。当初は、本校の開発した商品を若松商業高校が販売し、売上げを義援金としていただきました。その後、若松商業高校から「一緒に商品を売って交流したい、震災の記憶を風化させたくない」との声が上がり、明治町商店街復興組合の協力で本校生徒・教職員を招待しての若松商業高校との合同の販売実習が実現しました。販売実習の際は、両校とも独自のノウハウを出し合い、お互いの良いところを吸収しあいながら販売活動を行いました。両校が持ち寄った商品の中には、よくわからない商品もあり、必然的にコミュニケーションを取り交流を深めることができました。また、お客様からも「頑張って、応援しているよ」などの温かい言葉をたくさんかけていただきました。多くのつながりを感じることができ、遠く離れていても応援してくださる人たちがたくさんいることを実感しました。

姉妹校である青森県立黒石商業高等学校では、「誓いのことば」実践プロジェクトのボランティア組織を立ち上げ、宮古市や本校への災害ボランティア活動に尽力していただきました。家屋の泥出しが主な活動でしたが、震災当初から素早い活動を展開していただき、姉妹校交流も20年を迎え、絆を深

めることができました。

私たちは震災当初、多くの救援物資により命をつなぐことができました。しかし、時間の経過とともに余剰物資に変化し、無料提供等の影響から商品を買わない状況となり、商店街にとっては死活問題となりました。また、義援金を地域経済の活性化として活用しようとしても、現金が必ずしも宮古地域を潤してくれるとは限りませんでした。そこで、義援金を地域通貨に変換したうえで寄付を行うことにしました。今年2月に岐阜市立岐阜商業高等学校より市岐商デパートの売上げや街頭募金、福岡県立若松商業高等学校からチャレンジショップの売上金を復興支援としていただきました。その義援金を宮古地域の店舗限定で利用できる地域通貨「リアス」に変換し、宮古市教育委員会を通じて、小中学生の震災遺児・孤児へ渡すことができました。年度末の新入学シーズンだったこともあり、小中学生のみならず商店街からも感謝の言葉をいただきました。



「先生、学校が楽しい！」、東日本大震災津波から1ヶ月半後、学校が再開した日の生徒の一言です。私は、改めて学校教育の素晴らしさと必要性を感じ、今でも活力となっています。本校では、現在も4分の1の生徒が被災しており、仮設住宅で暮らす生徒もたくさんおられます。東日本大震災津波から日常を取り戻すことに奔走した2年間ではありましたが、そのなかで多くのつながりや絆が生まれました。それを大切にして今後も継続・発展させていくことが使命だと感じています。岩手県宮古市の将来を担う若い世代のために、学校間交流も深化させながら、商業教育の根幹である人づくりを実践していきたいと思えます。